



MUSIC PEN CLUB, JAPAN

2021 年度 第 34 回ミュージック・ペンクラブ音楽賞決定！！

《クラシック》

1. ソロアーティスト部門 池田香織 (メゾ・ソプラノ)
2. 室内楽・合唱部門 葵トリオ
3. オペラ・オーケストラ部門 東京二期会
4. 現代音楽部門 松平敬 (バリトン)
5. 研究評論・出版部門 沼野雄司著『現代音楽史 - 闘争しつづける芸術のゆくえ』中公新書
6. 功労賞 濱田滋郎 (音楽評論・スペイン音楽研究家)

《ポピュラー》

1. 最優秀作品賞 山田参助と G.C.R.管絃楽団『大土蔵録音 2020』
2. イベント企画賞 フジロック(主催：スマッシュ)と
スーパーソニック(主催：クリエイティブマンプロダクション)
3. 新人賞 角野隼斗
4. 著作出版物賞 大和田俊之著『アメリカ音楽の新しい地図』(筑摩書房)
5. 功労賞 村上“ポンタ”秀一

《オーディオ》

1. 技術開発部門 アキューフェーズ株式会社/CD プレーヤー
・ DP-1000 : SA-CD/CD トランスポート
・ DC-1000 : MDSB デジタル・プロセッサー
2. 録音作品部門 井上道義指揮 新日本フィルハーモニー交響楽団
『ショスタコーヴィチ:交響曲 第 8 番』 オクタヴィア・レコード
OVCL-00761 レコーディング&マスタリング・エンジニア 江崎友淑
ノミネートなし
3. 特別賞

授賞式

2022 年 4 月 20 日(水) 14:00-17:00

文京シビックセンター・スカイホール

〒112-8555 東京都文京区春日 1 丁目 1 6-2 1 電話 : 03-5803-1100

新型コロナウイルスの影響で事前に登録した関係者のみで行ないます。

2021 年度ミュージック・ペンクラブ音楽賞に関するお問い合わせは下記までお願いします。

一般社団法人ミュージック・ペンクラブ・ジャパン <http://www.musicpenclub.com>

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 1 丁目 34 番 5 号 いちご東池袋ビル 6 階

MPCJ 事務局 080-8051-6652 / mail1@musicpenclub.com

2021年度 第34回ミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞者一覧

Comments & Profile

ミュージック・ペンクラブ音楽賞とは、少数の選考委員が選ぶ従来型の賞とは異なり、ミュージック・ペンクラブ・ジャパン約 160 名の全会員による自主投票によって選定されます。授賞対象は、基本的に、日本でその年に公開または発表された音楽界の全プロダクツやイベントです。それは録音録画の形で発売されたもの、他、公演、著作、技術開発を含みます。選考基準は、当会の「クラシック」「ポピュラー」「オーディオ」の分野ごとに設けられ、各分野で授賞対象者・団体をノミネートし、最終的に全会員の分野を超えた投票によって決定されます。

《クラシック》

ソロ・アーティスト部門



池田香織 (メゾソプラノ) Kaori Ikeda

池田香織は、書かれたものを咀嚼し解釈する知性に長けた、日本のオペラ界では貴重な歌手である。「歌を模倣して歌う」ことが、決してないのだ。それでいて表現は小賢しくなく、対象への完全な没入を感じさせる。低音域のよく響く暗めの声音が特徴だが、近年では高音域でも声の勁さが増し、また演技空間をより巧みにデザインするようになった。

2016年のイゾルデ役が、一つの突破口となったであろう。そしてついに2021年、新国立劇場《ワルキューレ》のブリュンヒルデで大輪の花を咲かせた。ヴォータン役のミヒャエル・クプファー＝ラデツキーと並んでまったく遜色がなかったのは見事というほかない。ワーグナー作品に留

まらず、東京二期会ではヴェーヌス役のほかに、デリラ役でも高い評価を得た。本賞を贈るにふさわしい、大活躍の年であった。(船木篤也)

プロフィール 池田香織

慶応義塾大学法学部卒業。東京二期会・新国立劇場など数々のオペラに出演。特にワーグナー作品においては、東京二期会《トリスタンとイゾルデ》(ライブツィヒ歌劇場との提携公演)イゾルデ、びわ湖リング《ラインの黄金》エルダ、《ワルキューレ》《ジークフリート》《神々の黄昏》ブリュンヒルデなどに出演し高い評価を得ている。コンサートに於いても、マーラー交響曲第2番「復活」、モーツァルト「ミサ曲ハ短調」「レクイエム」、都響マーラー「交響曲第3番」(E. インバル指揮)、コンポージアム 2015《遙かなる愛》(サーリアホ作曲)などソリストとしても活躍。NHK ニューイヤーオペラコンサート等にも出演。二期会会員

室内楽・合唱部門



©Nikolaj Lund

葵トリオ Aoi Trio

葵トリオにとって、ドイツの難関、ARD（ミュンヘン）国際音楽コンクールで日本人室内楽チームとして東京クワルテット以来48年ぶりの第1位（ピアノ三重奏部門）に輝いたことはもはや、遠い昔の通過点ではない。秋元孝介（ピアノ）、小川響子（ヴァイオリン）、伊東裕（チェロ）は一線のソロ活動を展開しながらミュンヘン音楽大学で室内楽の研鑽を続け、ピアノ三重奏の新しい地平を切り開く。定番に安住せず、演奏頻度の低い作品も積極的に手がけてきた。2021

年12月の名古屋フィルハーモニー交響楽団定期演奏会（川瀬賢太郎指揮）ではイタリア近代の作曲家カゼッラの「三重協奏曲」でソリストとトリオの魅力合体させた新境地を示し、喝采を浴びた。

（池田卓夫＝音楽ジャーナリスト@いけたく本舗®）

プロフィール 葵トリオ

第67回ミュンヘン国際音楽コンクールで優勝した、現在最も注目を集めるピアノ三重奏団。「葵/AOI」は、3人の名字の頭文字をとり、花言葉の「大望、豊かな実り」に共感して名付けた。これまでに国内の主要なホールで演奏するほか、欧州各国で出演。2021年には札幌交響楽団と名古屋フィルと協演。紀尾井ホールでは2021～2023年度のレジデント・シリーズを務め、サントリーホールとは2021年から7年間のプロジェクトが進行している。リリースされた2枚のCDはレコード芸術誌で特選盤に選出。第28回青山音楽賞バロックザール賞、第29回日本製鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞、第22回ホテルオークラ音楽賞を受賞。

オペラ・オーケストラ部門



東京二期会

Tokyo Nikikai Opera

2020年予定の公演のコロナ禍による延期分もあわせ、例年以上のオペラを上演した。国内の歌手たちの奮闘に加え、指揮者などの来日が立て続けに中止となり、短期間での変更を余儀なくされるなか、新進の起用など積極的な対応により、明日につながる

成果をあげた。《サムソンとデリラ》と《ルル》のマキシム・パスカル、《魔笛》のギエドレ・シュレキエテ、《ファルスタッフ》のレオナルド・シーニなどの俊英指揮者とは、今後も関係が深まることを期待したい。とりわけ、カロリーネ・グルーバー演出による《ルル》は、森谷真理を初めとする熱気に満ちた歌唱、刺激的な舞台、生彩に富んだオーケストラと三拍子そろい、特筆に値する充実の公演だった。

(山崎浩太郎)

プロフィール 東京二期会

1952年三宅春恵、川崎静子、柴田睦陸、中山悌一の4名が中心となり、志を同じくする12名の声楽家とともに「二期会」を結成、現在は2,700名超の会員を擁する国内最大級の声楽家団体となっている。旗揚げ公演《ラ・ボエーム》の後、これまでに《ピーター・グライムズ》《パルジファル》《ダナエの愛》等の日本初演を含め多くの公演を行う。近年は欧米主要歌劇場との共同制作や第一線で活躍する指揮者、演出家との協働により、国内外で高い評価を受ける。これまでに文化庁芸術祭大賞、三菱UFJ信託音楽賞、ミュージック・ペンクラブ音楽賞、モービル音楽賞他多数受賞。オペラ及び声楽全般にわたる公演活動とともに、二期会オペラ研修所の運営等、オペラ歌手育成を通して声楽全般の振興を図り、我が国芸術文化の発展への寄与に努めている。

現代音楽部門

松平敬 (バリトン) Takashi Matsudaira



©Lasp Inc.

松平敬は、幅広い表現力と啓かれた耳を兼ね備えたバリトン歌手。既に、2019年に第32回のミュージック・ペンクラブ音楽賞の研究・評論部門で受賞しているが、今回は本職の歌唱を高く評価したい。松平は、チューバ奏者の橋本晋哉との「低音デュオ」の一員として、日本の同時代の作曲家に新作を委嘱し、大きな成果を収めている。また、10月に開催した自らのリサイタル（「松平敬バリトン・リサイタル〜声×打楽器×エレクトロニクス」）でも、クセナキスや日本の作品で変幻自在の歌唱力を発揮して、聴衆を魅了した。そのほかにも、「低音デュオ」として、子ども向けの演奏会を企画するなど、意欲的な活動を繰り広げている。（満津岡信育）

プロフィール 松平敬

東京芸術大学卒業、同大学院修了。現代声楽曲のスペシャリストとして、湯浅譲二、松平頼暁、高橋悠治、池辺晋一郎、西村朗など150曲以上の作品を初演。これまでサントリーホール・サマーフェスティ

バル、新国立劇場、コンポージウム（東京オペラシティ財団）などに出演。CD 録音においては、一人の声の多重録音を駆使した『MONO=POLI』（平成 22 年度文化庁芸術祭優秀賞）など 3 枚のアルバムを発表。チューバの橋本晋哉氏との「低音デュオ」名義でも 2 枚の CD をリリース。2019 年には、シュトックハウゼンのほぼ全作品を網羅した著書『シュトックハウゼンのすべて』を出版（第 32 回ミュージック・ペンクラブ音楽賞・研究評論部門受賞）。

研究評論・出版部門

沼野雄司著『現代音楽史 - 闘争しつづける芸術のゆくえ』中公新書 Yuji Numano



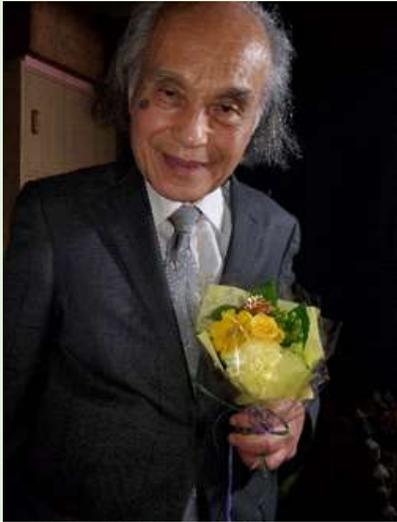
社会思想や芸術思潮との関連から、時代と闘う音楽の道行きを見通しよく概観する快著。20 世紀初頭以降の「クラシック音楽」の複雑多岐な創作冒険を、二つの世界大戦、冷戦、1968 年の闘争、電子テクノロジーの発達、進歩への懐疑を経験して 21 世紀にいたる社会状況の変動とともに見渡して行く。現代音楽を「孤立した領域」としてとらえるのではなく、少数者を対象とする閉塞の外へ連れ出そうとする意志が頼もしい。そのためには、「人間の想像力の限界に挑むゲームのような様相を呈した」現代音楽の妙味を説くトーンそのものが、ストーリーに相応しく利発で活動的であることが肝要だ。本書の筆致は愉快的魅力を放ち、著者の体感や諸作品への愛着を、批評も端的に籠めながら、小気味よくアクチュアルに伝えている。（青澤隆明）

評も端的に籠めながら、小気味よくアクチュアルに伝えている。（青澤隆明）

プロフィール 沼野雄司

東京藝術大学大学院博士課程修了。博士（音楽学）。現在、桐朋学園大学教授、神奈川芸術文化財団芸術参与。2008 年度、2020 度はハーバード大学客員研究員。著書に『孤独な射手の肖像 エドガー・ヴァレーズとその時代』（春秋社、第 29 回吉田秀和賞）、『リグティ、ベリオ、ブルーゼ 前衛の終焉と現代音楽のゆくえ』『ファンダメンタルな楽曲分析入門』（いずれも音楽之友社）、『光の雅歌 西村朗の音楽』（春秋社、共著）、など。国内の音楽関係学会はもとより、アメリカ、中国、オランダ、リトアニア、ジョージア（グルジア）、アイルランドなどの国際学会で発表。また、読売新聞で批評を執筆する他、サントリー音楽賞ほかの審査員を務める。

功労賞



撮影濱田吾愛氏

濱田滋郎 Jiro Hamada

生涯を通じてスペイン音楽、中南米音楽、ギター音楽の紹介や普及に尽力し、執筆、教育、音楽祭の主催等、多岐に亘って絶大な功績を残した唯一無二の存在。フラメンコやフォルクローレ等のジャンルを超えた業績や、日本フラメンコ協会会長、スペイン音楽こだまの会主宰等の社会的活動も光っていた。こうした分野で並ぶ者なきオーソリティーであり続けただけでなく、ピアノ音楽をはじめとするクラシック音楽全般においても、温かな眼差しと愛情に溢れた語り口で明解な論評を展開。長く読者を魅了し、幅広い啓蒙に寄与した。2021年3月21日、研究・評論活動のさなかでの逝去に哀悼の意を表すると同時に、その多大な功績に対して功労賞を贈りたい。

(柴田克彦)

プロフィール 濱田滋郎

音楽評論家、スペイン文化研究家。1935年東京生まれ。少年時代よりスペイン・中南米の文学、音楽に興味を抱いて研究、1960年ごろより翻訳、雑誌での執筆、レコード解説などの仕事に就く。1978年より東京藝術大学、東京外国語大学、立教大学などで非常勤講師。おもな著書に『フラメンコの歴史』『エル・フォルクローレ』（以上晶文社）、『スペイン音楽のたのしみ』（音楽之友社）、『約束の地、アンダルシア』（アルテスパブリッシング）、訳書にカーノ著『フラメンコ・ギターの歴史』（パセオ）、スビラ著『スペイン音楽』（白水社文庫クセジュ）ほか。1990年より日本フラメンコ協会会長。1985年より清里スペイン音楽祭を総監督として責任開催。1984年第3回蘆原英了賞受賞。2021年3月没。

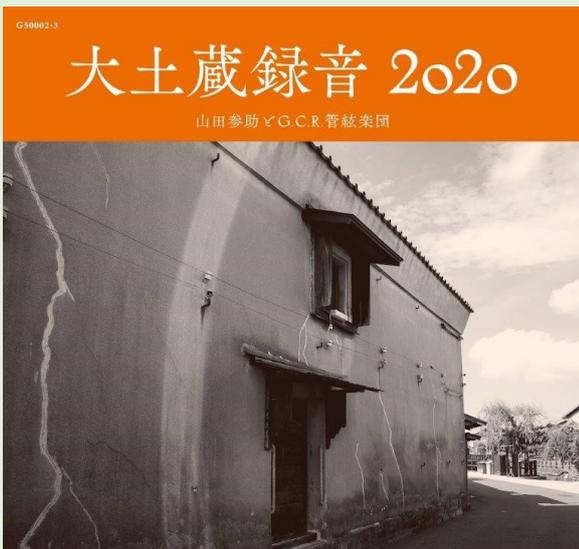
《ポピュラー》

最優秀作品賞

山田参助と G.C.R.管絃楽団『大土蔵録音 2020』（ぐらもくらぶ/G50002~3）



学究心と遊び心が絶妙に融けあう。精魂込めた歌唱、奥行きを感じさせるモノラル録音、キメ細かなアレンジは、まるで音のタイムマシンだ。戦前のレコードを丹念に聴き取り、採譜したのは「カムカムエヴリバディ」のサントラにも参加していた青木研。「泣いちゃいけない」では、“浅草(エンコ)の人気者(ジャズシンガー)”こと丸山和歌子の原ヴァージョンに従い、バンジョー→三味線のソロ・リレーも取り入れられている。バンジョーと三味線だ。こんな組み合わせ、ビックス・バイダーベックにもカサ・ロマ・オーケストラにもない。あんパンやインスタントラーメンの発明に通じる独自性をもって、戦前の楽師たちがスウィングしていたのかなと思うと、ますます昭和初期が身近に感じられる。(原田和典)



プロフィール 山田参助と G.C.R.管絃楽団

コロナ禍の 2020 年 12 月、千葉県香取市佐原地区にある戦前の土蔵、戦前の A 型ベロシティマイク、戦前の歌謡曲、戦前のアレンジ、戦前の歌唱、戦前の一発録音という、とことんまで戦前のテイストとロスト・テクノロジーの再現を試みる企画が下見・実験録音を経て持ち上がった。

幼少より戦前の内外ジャズ音楽に魅了され、世界的バンジョー奏者でもある青木研を全曲のアレンジ担当とバンドマスターに据え、彼の呼びかけに集まった主にトラッド・ジャズのプレイヤーたちによる戦前風の演奏と、架空流行歌ユニット「泊」のボーカルもつとめる漫画家・山田参助による戦前風の歌唱のコラボにより、ここに「山田参助と G.C.R.管絃楽団」が誕生した。

イベント企画賞

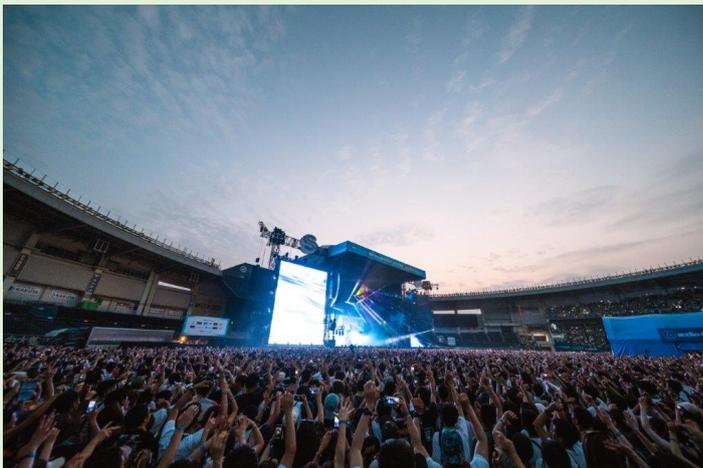
フジロック（主催：スマッシュ）とスーパーソニック（主催：クリエイティブマンプロダクション）



フジロック ©宇宙大使☆印スター

コロナの流行で観客を集めるイベントが軒並み中止を余儀なくされた中であって、スマッシュの「フジロックフェスティバル」とクリエイティブマンプロダクションの「サマーソニック」はどちらも厳重な感染対策を講じたうえで開催し素晴らしい成功を収め、音楽ファンのみならず、ミュージシャン、ステージ関係者など多大な人々に大きな希望と勇気を与えた。

（朝妻一郎）



スーパーソニック

プロフィール フジロック

「音楽と自然の共生」をテーマに毎年7月下旬に新潟県湯沢町苗場スキー場にて開催される国内外200組以上のミュージシャンが集う国内最大級の野外音楽イベント。世界の重要音楽フェスティバルを格付けする「フェスティバル250」でコーチェラ（米）グラストンベリー（英）に次いで、3位に選出されている。環境保護への取り

組みを続けながらも、グローバルレベルのアーティストらを招聘し観客を魅了し続けている「世界一クリーンなフェス」と評されている。2020年は残念ながらコロナ渦の為、開催を延期。21年は国内アーティストだけになるが徹底した感染対策の下、開催出来た事はコンサート業界に大きな勇気を与えた。

プロフィール スーパーソニック

2000年、国内初の関東・関西の2大都市での同時開催&出演アーティストを総入替、という画期的なフェス形式のもと開催。グリーン・デイ、ブルース・エクスプロージョンをヘッドライナーに、国内外のアーティストが集結した。その後も伝説のバンド、ガンズ・アンド・ローゼズが出演するなど音楽業界の“事件”ともいべきその瞬間を、衝撃と共に多くのオーディエンスが体感。レディオヘッド、ブラー、オアシス、メタリカ、リンキンパーク、ダフトパンク、クイーンら海外フェスも羨むようなラインナップが毎年話題となりステージ数、アトラクションエリアも拡大。07年にはヘッドライナーに史上最速・最年少のアーケティック・モンキーズを抜擢、サマソニ史上初のHIPHOPアクトのヘッドライナ

ーとしてブラックアイド・ピースを招聘するなど、常に変化し続ける音楽シーンを見事に反映した世界的フェスティバルに変貌を遂げた。レディ・ガガやテイラー・スウィフトなど世界的な注目アーティストをいち早くキャッチしてきたのもサマソニの大きな特徴となっている。

20周年を迎えた2019年は、B'z、レッド・ホット・チリ・ペッパーズ、ザ・チェインスモーカーズをヘッドライナーに迎え東阪で30万人の動員を記録した。

パンデミックを経て3年ぶりの開催となる2022年、日本が誇るインターナショナル・フェスティバルとして新たな歴史を切り開く事になる。

新人賞



©@ogata_photo

角野隼斗

角野隼斗は、一言では語れない多面的な魅力を備えたピアニストである。クラシック、ジャズ、ポピュラーといった枠に留まらずボーダレスな挑戦を続けている。すべてのジャンルを真摯に取り組んでいる。その活動は、目を見張るものがある。昨年は、第18回ショパン国際ピアノコンクールでセミファイナリストとなり、ジャズの聖地ブルーノート東京でのソロ公演も大成功だった。Cateen(かていん)名義のYouTubeチャンネルは登録者数が90万人を突破し今なお増え続けている。

デビュー・アルバム『HAYATOSM』は、傑出した才能の輝きを示している。角野は、音楽業界の“大谷翔平”と呼ぶべき存在である。今後どのような活動を繰り広げていくのか絶対に見逃せない。(高木信哉)

プロフィール 角野隼斗

1995年生まれ。2018年、東京大学大学院在学中にピティナピアノコンペティション特級グランプリ受賞。これをきっかけに、本格的に音楽活動始める。2021年、第18回ショパン国際ピアノコンクールでセミファイナリスト。これまでに読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団等と共演。2020年、1stフルアルバム『HAYATOSM』(eplus music)をリリース。オリコンデイリー8位を獲得。クラシックで培った技術とアレンジ、即興技術を融合した独自のスタイルが話題を集め、"Cateen(かていん)"名義で活動するYouTubeチャンネルは登録者数が94万人超、総再生回数は1億回を突破(2022年2月現在)。新時代のピアニストとして注目を集めている。

著作出版物賞

大和田俊之著『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房）



本書で取り上げられるのはテイラー・スウィフト、ブルーノ・マーズ、ケンドリック・ラマー、カーディ・B、BTSをはじめ、21世紀のアメリカのポピュラー音楽界を席卷してきた人たちだ。それら多様なポピュラー音楽の現状が歴史的社会的背景をふまえて縦横無尽に論じられている。本書の構想は2016年にドナルド・トランプが大統領に選ばれた衝撃からはじまったという。ブラック・ライヴズ・マター、ラテン系やアジア系アメリカ人の浮上、ヘイト・クライム、フェミニズム、パンデミックによる活動制限、SMSやサブスクによる音楽視聴環境の変化など、参照される話題は多岐にわたる。アメリカのポピュラー音楽のいまを見事に俯瞰して切り取った評論集。（北中正和）



プロフィール 大和田俊之

慶應義塾大学法学部教授。専門は米文化、ポピュラー音楽研究。『アメリカ音楽史』（講談社）で第33回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）受賞。他に編著『ポップ・ミュージックを語る10の視点』（アルテスパブリッシング）、長谷川町蔵との共著『文化系のためのヒップホップ入門1、2、3』（アルテスパブリッシング）、細川周平編著『民謡からみた世界音楽』（分担執筆、ミネルヴァ書房）など。2020年・21年ハーバード・イェンチン研究所客員研究員。『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房）は、ストリーミングというメディアの変化とトランプ政権誕生に揺れる2010年代のアメリカのポピュラー音楽シーンを描写した著書。

功労賞



村上“ポンタ”秀一

たとえば、吉田美奈子の「恋は流星」や山下達郎の「DANCER」を真の名曲たらしめている軽やかな16ビート。何度、耳にしても胸躍る心地よいこのリズムの主こそが村上“ポンタ”秀一である。1970年代、ロックやフォークのバックギングにおいて、ジャズ畑のミュージシャンがどうしても叩き出せなかったグルーヴ感を村上は膨大な数のレコードを聴き漁り、たゆまぬイメージ・トレーニングを繰り返すことで自らの手中に収めた。“溢れ出る歌心の

ように、リズムを自在にデザインする”そんな志で紡がれた素晴らしいプレイの数々。日本を代表するドラム奏者であるのはもちろん。YouTubeを発火点に、世界中の人々を虜にする日本のシティ・ポップ。その洗練された音楽のボトムを築いた立役者という観点からもあらためてその業績を評価したい。

(ヒロ宗和)

プロフィール 村上“ポンタ”秀一

1951年1月1日兵庫県生まれ。1972年、フォーク・グループ“赤い鳥”に加入し、プロとしてのキャリアをスタート。井上陽水、渡辺貞夫、山下達郎、吉田美奈子、矢沢永吉、沢田研二、DREAMS COME TRUEなど、ジャズ、ロック、歌謡曲の垣根を越えて数え切れないほどのセッションやライブに参加。そのグルーヴ感溢れるドラミングは他の追随を許さない。レコーディング楽曲は1万4千曲以上にのぼるといわれ、日本の音楽シーンを変えたドラマーとして高く評価されている。95年、リーダー・バンドである“PONTA BOX”を率いて、モントール・ジャズ・フェスティバルに出演。圧巻のパフォーマンスで現地の観客から絶大な支持を得る。晩年近くまで、年間200本に迫る旺盛なライブ活動を続けていたが、2021年、3月9日、視床(ししょう)出血により死去。享年70歳。

《オーディオ》

技術開発部門



アキュフェーズ株式会社/CD プレーヤー

- ・ DP-1000 : SA-CD/CD トランスポート
- ・ DC-1000 : MDSB デジタル・プロセッサ

創立 50 周年というアキュフェーズの記念すべき年に開発された、セパレート型の SACD/CD トランスポートと DA コンバータである。同社が長年培ってきたディスクメディアに対する探究心が随所に結実した後世に名を遺すモデルである。新開発のドライブメカニズムを低重心に懸架しディスクからの読み取り精度を飛躍的に改善する一方、DA コンバータについては素子の特性を最大限に引き出せるよう周辺回路の使いこなしと磨き上げに力を注いでいる。またこの二つのモデルは技術的な特徴だけでなくその成果を音楽再生において十全に発揮していることだ。ライブネスが豊かで迫真性

に富んだサウンドに圧倒される当代一の組み合わせである。(潮 晴男)

録音作品部門



井上道義指揮新日本フィルハーモニー交響楽団/

ショスタコーヴィチ：交響曲第 8 番

ショスタコーヴィチの交響曲第 8 番は編成が大きく演奏の難度が高い作品で、公演の機会は限られている。日本のオーケストラによる優れた録音への期待が高まるなか、新日本フィルハーモニー交響楽団の名演が SACD ハイブリッド盤で登場した意義は大きい。2021 年 7 月に行われた定期演奏会をライブで収録した本作品は、対照的な作風のジャズ組曲第 2 番（抜粋）も併せて収録して

当日のプログラムをそのまま再現しており、ショスタコーヴィチの多様な側面が浮かび上がる。特に第 8 番では静寂に潜む悲痛な空気から激烈を極めた大音響まで作品の全体像を精緻に描き出した優秀録音で、緊張感漂う客席の空気感も忠実にとらえている。(山之内正)

特別賞 ノミネートなし